



TITLE:

天国と政治 ——ダンテ『帝政論』
と『神曲』〈天国篇〉——(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

星野, 倫

CITATION:

星野, 倫. 天国と政治 ——ダンテ『帝政論』と『神曲』〈天国篇〉——.
京都大学, 2018, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20826>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2020-12-01に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	星野 倫
論文題目	天国と政治 —— ダンテ『帝政論』と『神曲』〈天国篇〉 ——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ダンテ『帝政論』の成立年代について調査を進め、その結果に基いて『神曲』〈天国篇〉の政治的側面に新たな照明を当てようとするものである。</p> <p>第1章「天国と政治 —— 日本におけるダンテ受容の欠落部 ——」は、日本のダンテ受容史を文学者・キリスト者・研究者という三種の受容者に即して整理し、特に影響力をもった文学者のダンテ受容が〈地獄篇〉重視に傾斜すると同時にダンテの政治的側面を捨象していった経緯を検証する。そこから明らかになるのは、政治（地上の幸福の追求）についてダンテが集中的に考察した『帝政論』の研究および、その照明のもとで『神曲』（特に〈天国篇〉）の政治的側面を解明する作業の必要性である。</p> <p>第2章「『帝政論』成立年代研究の準備と構想」では、『帝政論』評価において成立年代が重要な意味をもつことを念頭に、成立年代研究を『帝政論』研究の基軸に据える。そして、ダンテの時代の政治状況および『帝政論』成立年代をめぐる先行研究を整理した上で、文献学的調査・論理学的調査・哲学的調査・政治神学的調査という4つの調査を構想する。以下第3章～第6章は、この4つのテクニカルな調査の報告である。</p> <p>第3章「<i>«Sicut in Paradiso Comedie iam dixi» (Mon. I, xii, 6) —— ダンテ『帝政論』年代決定のための外的証拠をめぐって ——</i>」は、〈天国篇〉に言及した『帝政論』の一節に関する文献学的調査である。章題にもなっているこの一節は、長い間『帝政論』の本文と認められていなかったが、論者はまず、この一節を本文と認めた Ricci (1965) と Shaw (2009) の校合の妥当性を再検証し、次いで、これを本文と認めない Quagliioni (2014) による最新の別の読みの提案を棄却する。一方、『カングランデ・デッラ・スカラ宛書簡』中の <i>«alia utilia rei publice»</i> 「公共に有益な他のこと（を目下のところ断念せざるを得ない）」という一節 (<i>Ep. XIII, 88</i>) が『帝政論』を指すとする Padoan (1999) の解釈を独自の用例調査にもとづいて支持する。この前提に立つと、<i>Ep. XIII</i> 執筆時点（『神曲』完成直後）において『帝政論』は未だ完成していなかったことになる。</p> <p>第4章「ダンテと三段論法」は、論理学的分析である。『饗宴』（1304-7年）と『帝政論』の間には三段論法理解において大きな進歩が見られ、両作品の間にペトルス・ヒスパーヌス『論理学綱要』・『共義語論』等の摂取が想定される。また、『帝政論』第3巻で活用される「論駁 <i>disputatio</i>」形式がダンテの著作内で用いられるのは、『帝政論』・『神曲』〈天国篇〉（執筆時期 1316年以降）・『水陸論』（1320年）に限られ、その前提としてアリストテレス『ソフィスト的論駁について』およびヒスパ</p>			

一ヌス『論理学綱要』第7章の摂取が想定される。そこから、ダンテの本格的な論理学摂取が〈天国篇〉執筆開始直前期に行われ、その後〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』が近接した時期に執筆されたとする仮説が導かれる。

さらに、第5章「ダンテにおける可能知性 *intellectus possibilis* の問題」は、第1巻第3章の「帝政の哲学的基礎づけ」を扱う。可能知性という人間固有の能力を十全に現実化するには類としての人間全体の共働が必要であると主張した直後に、ダンテは、これにはアヴェロエスも同意していると言う。ここでの議論は、単一可能知性の現実化のために諸個体の共働を重視したアヴェロエス主義者ジャンダンのヨハンネスの思想に類似する。『饗宴』および〈煉獄篇〉までのダンテは「可能知性」という用語を個人に属するものとして用いていた。これに対して 1310 年代後半から普及し始めたアヴェロエス主義者の主張によれば、「可能知性」の現実化には人類全体の共働が求められる。ダンテはこれを知るに及んで、〈天国篇〉においてはこの用語を個人に対して用いることをやめたと考えられる。すなわち、『饗宴』および〈煉獄篇〉の時点における彼の「可能知性」理解は、〈天国篇〉の段階では既に受け入れ難いものとなっていたのである。そして、自らの考える「可能知性」がアヴェロエス的な意味において類的なものであることを『帝政論』で明言したものと考えられる。

最後に、第6章「ダンテにおける《太陽と月の比喩》」の政治神学的調査は、「教皇＝太陽、皇帝＝月」、すなわち教皇を主、皇帝を従とする《太陽と月の比喩》に対するダンテの態度変更を問題にする。ハインリヒ 7 世南下期の書簡 V、VI、VII は、クレメンス 5 世とハインリヒとの良好な関係を背景にこの比喩を受けいれているが、クレメンスの「裏切り」が明らかになった時期の〈煉獄篇〉第16歌および書簡 XI では《太陽と月の比喩》は姿を消し、教皇・皇帝の「二つの太陽」という二元論的イメージが提示される。そして『帝政論』第3巻 第4章で《太陽と月の比喩》は徹底的論駁の対象となる。この《太陽と月の比喩》の完全な棄却は時期的にも最終段階に属するものとするのがもっとも自然である。

以上の調査をふまえ、第7章「結論・天国と政治 —— ダンテ『帝政論』と『神曲』〈天国篇〉 —— 」では、最終的仮説が提案される。それは、〈天国篇〉執筆開始直前の論理学・哲学等の集中的摂取を共通の基盤として〈天国篇〉と『帝政論』は平行的に執筆され、〈天国篇〉・『帝政論』の順に完成を見た、とするものである。

この仮説に立って〈天国篇〉を再検討する時、『帝政論』と同時期に書かれた天国篇に込められた政治的メッセージがあらためて浮き彫りになる。『神曲』という預言的物語の精髓は、〈天国篇〉終盤の聖ペテロとベアトリーチェの言葉に集約されている。それらはいずれも、貪欲ゆえに宗教と政治の境界を越えて世俗政治に介入する教皇への弾劾と、普遍的帝政の再興への期待を表明するものである。これが〈天国篇〉の政治的結論であり、その内容は『帝政論』第3巻最終章と完全に一致する。

〈天国篇〉でダンテが皇帝を求める理由も『帝政論』から明らかになる。人間は幸福な生の実現のため社会を形成するが、家族・近隣社会・諸都市・諸王国といった下位社会集団は常時争闘の内にある。それを乗り越えるためには、その都度、第三者の審級（上位審級）が要請される。それを人類全体にまで拡張した時、必然的に皇帝の存在が求められるのである。そしてさらに、アヴェロエス主義に想を得た「類としての人間における可能知性の現実化のためには人類全体の普遍的平和の擁護者として普遍的帝政が必要である」とする哲学的洞察が加わる。これが最終的な形に達したダンテの政治思想であり、そこで主張される皇帝あるいは帝政とは、具体的な同時代の神聖ローマ皇帝もしくはその候補者のいずれかといった次元のものではなく、極めて抽象的な政治哲学概念であり、〈天国篇〉を貫いているのもこうした理念に他ならない。そして、その〈天国篇〉に対する自己注解的な著作こそが『帝政論』であったとする仮説が本論文の提起する結論である。

(論文審査の結果の要旨)

イタリア文学史においてダンテの存在は特別な意味を持つ。代表作『神曲』は発表と同時に大きな話題となり、その後、多少の浮き沈みがあったとはいえ、現代に至るまで七百年にわたってイタリア文学を代表する作品として君臨し続ける一方、創作過程や執筆年代に謎が多いことから、テーマ、内容、思想、言語、表現形式といった各側面のいずれもが研究し尽くされたとは到底言えない状態にあるからである。これまでの研究の蓄積は膨大であり、現在なお、1970年代に当時最高の碩学たちが各項目を担当・執筆した Treccani 版 *Enciclopedia Dantesca* 全六巻がその後の研究の出発点となって、あらゆる問題に関してイタリア内外で活発な議論が戦わされている。従ってダンテあるいは『神曲』を総体として研究対象とすることは不可能と言ってよく、本研究も『帝政論』の創作年代を核とする個別研究である。しかしながら、論者の目指すところは『帝政論』の創作年代をキーとしてその内容から〈天国篇〉の、ひいては『神曲』そのものの新たな解釈を探ることであり、多角的かつ適切な方法論と先行研究の成果を遺漏なく押えた周到さによって十分な説得力を持つ好論文となっている。

『帝政論』をめぐってはかねてよりその創作年代に関して論争が絶えなかった。他の作品と異なり、ダンテが未だフィレンツェにいた13世紀中に書かれたとする説から最晩年の 1320 年頃の作であるとする説まで、文字通りありとあらゆる可能性が各論者によって主張されているのであるが、ダンテ自身の置かれた状況を含めてイタリア半島をめぐるヨーロッパの政治情勢そのものがこの間に大きく変化しているため、創作年代をめぐる議論が当該作品自体の解釈のみならず『神曲』との関連を考察するに当たっても決定的な重要性を持つからである。

本論文の中核をなすこの問題の検証を進めるに当たり、論者は文献学的調査と論述内容の分析とを区別した上で、それぞれの問題点に関して複数のアプローチによる多角的な検討を行なっている。文献学的には、①「外的証拠」、および ②ダンテの用いた論理学技法の特徴を検証し、次いで論述内容に関しては ③可能知性 *intellectus possibilis* をめぐる哲学上の議論、④《太陽と月の比喻》を用いた政治神学的議論、を検討課題とする。そして、①からは、「*Sicut in Paradiso Comedie iam dixi*」という挿入句が執筆当初からのものである可能性の高いことが再確認され、次いで②からはダンテが論証に用いる「三段論法」の技術的水準が、比較的初期の作品である『饗宴』におけるそれに比して大きく向上しており、〈天国篇〉および『水陸論』のそれとの共通性を示すことが明らかにされる。『水陸論』は1320年の作であることが判明しており、併せて③を検討することにより、「可能知性」の現実化には人類全体の共働が求められるとする主張がアヴェロエスの名とともに展開されていることから、それが『饗宴』および〈煉獄篇〉までのダンテによる「可能知性」理解とは相容れないものであることが証明される。最後に、④からは、教皇と皇帝をそれぞれ太陽と月に例える有名な《比喻》に対するダンテの態度の変遷のプロセスを考慮するに、『帝政論』にのみ現れるこの比喻の完全否定が他の作品とは明確に趣を異にすることが確認され

る。これらすべては、『帝政論』が『神曲』と同時期に執筆され、その完成後に書き上げられたダンテ最晩年の作品であったことを強く示唆するものである。

本論文の主要部分は以上の論証に当てられているが、着目点においても論証方法においても明白なオリジナリティが認められるのは「第4章 ダンテと三段論法」である。はじめに述べたようにダンテ研究の蓄積は膨大であり、世界中の研究者によって考えられる限りのテーマ、方法論が試みられていることから、オリジナルな視点による考察を展開することは、それ自体かなり困難であり、この章はその意味からして十分な評価に値する。しかしながら、本論文の価値はこうした点にのみ存するわけではなく、これと密接に関連する特質として各論証の綿密さを挙げることができる。文献学的に最も堅固な論証の行なわれているのは「第3章 «Sicut in Paradiso Comedie iam dixi»」である。この文言が *archetipo* に遡るものであることは、『帝政論』の校訂版(1996)を作成した Shaw の証明したところであるが、論者はこのエディションが発表された後にイタリアの研究者によって提起された反論についても、近年インターネットにより次々と参照が可能となっているオリジナル写本を用いて丹念にその内容を精査し、さらに別のダンテ作品『カングランデ・デッラ・スカラ宛書簡』に見える *alia utilia rei publice* の指すものが他ならぬ『帝政論』を指すとする Padoan の説に結び付ける。この主張に当たっても、論者は問題の表現を、その確立からキケローそして中世に至るまで跡付けた Gaudemet の詳細な研究に基いて検討し、Padoan 説の蓋然性の高さを見事に論証している。議論に用いられた個別研究はいずれも論者によるオリジナルなものではないが、それらの成果を総合することにより自らの主張に説得力を持たせる手法は、とりわけ先行研究に膨大な蓄積があるダンテ研究の場合には強力かつ有効なものとなる。論者のこうした姿勢は本論文の中核部分において常に徹底しており、その学術的価値の高さを決定づけている。

国際的にも十分に通用するレベルの優れた研究であるが、全体のまとめ方には若干の問題が無くはない。それは、わが国におけるこれまでのダンテ研究のあり方を総括した第1章と結論に当たる第7章とが、『帝政論』の創作年代を扱った中核部分から若干遊離した印象を与える点である。論者が情熱を傾けた最大の関心事は〈天国篇〉の正しい位置づけに立脚する『神曲』の総合的な理解であり、序章と終章も内容そのものは大変興味深いのであるが、この二つの章は取って付けたような印象を免れ得ず、実証的学術論文としてのまとまりを欠く結果となった点が惜しまれる。とはいえ、こうした弱点は研究成果の重要性と論文に対する評価を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成30年1月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。